【35】

氏名（本籍）	日比嘉高（愛知県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博甲第 2475 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	〈自己表象〉誕生の文化史的研究

主　査	筑波大学教授		名波弘彰
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒木正純
副　査	筑波大学教授		池内輝雄
副　査	筑波大学助教授		新保邦寛
副　査	筑波大学助教授		宮本陽一郎

論文の内容の要旨

本論文は，明治末ごろから文学・美術などといった文化領域で数多く見られるようになった〈自己表象〉という表現形態がいかにして成立したのかを考察したものである。

本論文の対象領域をさらに限定するならば次のようにいえる。つまり，明治40年の田山花袋「蒲団」発表あたりを境にして，作家が自分自身を登場人物として描く小説作品，すなわち〈自己表象テクスト〉が増加していた。さらにほぼ同時期から，絵画ジャンルにおいて自画像もまた増加し始めていた。この領域を横断して出現した相似的傾向を分析すべく，その表現形態を可能にした文化的諸条件を考察したのが本論文である。

論述の展開においては，次の二つの方向性が留意されている。まず第一には，従来，このような研究の枠組みは「私小説論」という文学史的領域の課題とされてきたが，その「私小説」という枠組みによる遡及的理解を批判し，明治末に〈自己表象〉が持ちえていた固有性を積極的に評価しようとしていることが指摘できる。〈自己表象〉という表現形態は，明治末から大正にかけて流行した表現法であった。流行したということは，そこにそれだけの魅力があったことを意味する。本論文は，「私小説」という文学史的な既成の参照枠を取り外し，その時代の中で表現が持ち得ていた固有の意味，あるいは同時代的な魅力をすくい取り，積極的に評価しようという方向性をもたせることにつとめている。

つぎに第二として，文学史，美術史という孤立的把握を排し，メディア・教育制度・慣習の変化などを組み込んだ歴史叙述を目指していることが指摘できる。従来の研究は，文学史なら文学の枠内のみで考えるという既成の学問領域にとらわれていた。しかしながら，「文学」という文化領域は，それだけで自立しているわけではなく，隣接するさまざまな領域と相互に情報を交換し，干渉しあって成り立っていると考えられる。本論文は，そうした枠組みの柔軟性，情報による相互交渉といった現象を流動的にとらえて歴史叙述に取り入れている。

本論文はⅡ部8章から成り立っているが，その内容は以下の通りである。

まず，第Ⅰ部は「〈自己表象〉の文化史」とし，明治後半から大正初頭にかけての史的記述を行っている。その内部は「第1章　メディアと読書慣習の変容」「第2章　「蒲団」の読まれ方と小説ジャンルの境界変動」「第3章　〈文芸と人生〉論議と青年層の動向――「人生観上の自然主義」という思想――」「第4章　自己を語る枠組み」「第5章　小結」の各章に分けられ，それぞれメディアと読書慣習，倫理学と文芸批評の枠組み，小説のジャンル

編成，近代的自画像観の形成，という諸問題が追究されている。

各章について言及すると，「第１章　メディアと読書慣習の変容」では，投書雑誌メディア『新声』を視座とし，作家の個人情報や作品の由来を穿鑿する題材/モデル情報が，いかなる編集方針の下でなされていたのかを検討し，同時にそれらの情報に対する読者たちの反応を分析している。また明治40年後半に起こった，小説のモデルをめぐる道義的論議「モデル問題」を取り上げ，読書慣習と文芸メディアにおける発言権，作家情報・モデル情報・作品三者の連関が検討されている。「第2章「蒲団」の読まれ方と小説ジャンルの境界変動」では，田山花袋「蒲団」に対する発表当時の読解のようすを追い，この小説が外部から価値づけられていくありさまを分析している。この作業から，それまで「小説」として認証されていなかった〈自己表象〉による創作が，小説ジャンルの一員として認定されていく過程が明らかにされている。〈自己表象〉という新しい表現形態をめぐって起こった，小説ジャンルの境界変動の分析が，ここでの課題となっているのである。「第３章　〈文芸と人生〉論議と青年層の動向――「人生観上の自然主義」という思想――」では，「実行と芸術」「芸術と実生活」などと呼ばれてきた明治41，2年の論争を再検討している。大作家と青年たちの間に存在した〈文芸と人生〉をめぐる指向性のギャップを検証しながら，青年たちにおける自然主義の意味が考察されている。この〈文芸と人生〉論議の構図は，第４章の〈自己〉論（探求論）の構図と相似形をなし，〈自己表象〉をめぐる世代間の相違を明らかにするものとなっている。「第４章　〈自己〉を語る枠組み」では，明治20年代後半に移入され，のちに中等修身科教育に導入されることになる倫理学説〈自我実現説〉を検証している。この学説の枠組みとその流布の形態を分析することにより，青年たちの〈自己〉をめぐる思考が成型されていった道筋が明らかにされる。さらに日露戦後の文芸評論界に見られる〈自己〉論の隆盛に注目し，その特徴や背景について考察されている。「第５章　小結――〈自己表象〉の誕生，その意味と機能」では，以上の各領域の分析を踏まえ，相互の連動性を指摘しつつ，第Ⅰ部の小結が提示されている。また誕生の経緯から考えられる〈自己表象〉の意味と機能――アイデンティティ形成とイメージ闘争――についても指摘されている。

第Ⅱ部は「〈自己表象〉と明治末の文化空間」と題され，具体的な作家・作品を対象として，微視的な視点からそれぞれの戦略や表象のあり方が考察されている。その内部の章立てをたどると以下のようになる。「第６章　自画像の問題系」では，自画像という画題が近代的な意味をまとっていくようすが分析される。検討対象は，東京美術学校西洋画科における卒業製作制度（自画像制作）と同校の校友会文学部の活動である。具体的な学校関連資料に当たりつつ卒業製作制度の機能が明らかにされ，校友会機関誌『校友会月報』から学生たちの心性の変化と絵画の読解枠の形成が考察されている。第７章は「帰国直後の永井荷風――「芸術家」像の形成――」と章題され，一人の作家のイメージがどのように形成されたのか，永井荷風を例にとって考察されている。アメリカ・フランスでの生活を終え明治41年に帰国した荷風は，当初は無名の青年作家だった。その荷風が自然主義文壇の中で特異な位置を占める有望作家として立つまでの過程が，作品中に見られる芸術家像と，作者である彼自身のイメージのオーバーラップという荷風自身の戦略として追究されている。第８章は「〈翻訳〉とテクスト生成――舟木重雄「ゴオホの死」をめぐって――」と章題され，大正初期における後期印象派画家の移入と，そのイメージを借り受けた小説創作のありかたが，舟木重雄のテクストを例に検証されている。それによると，舟木は明治末から活発になるゴッホの紹介とその神話化，同時期の神経病理解と青年表象，などといった要素を組合せながら，神経症的創作に向かう青年作家像を〈自己表象〉の枠組みを借りながら提示したと結論づけられている。結章では，本論文の提出した〈自己表象〉という概念が貢献しうる論点について展望し，その後積み残した課題が挙げられている。

審査の結果の要旨

以上の分析を踏まえて，本論文の結論からは，〈自己表象〉におけるアイデンティティ形成とイメージ闘争の二

つの機能が提起されることになる。この二つの提起は，優れた知見として学界に新たな問題提起をなすものと考えられるので，まず紹介しておこう。

アイデンティティ形成については，「作家の個性を発展させることがそのまま作品の味い意味，価値を，高くすることである」という枠組みが存在したと提起される。この枠組みは歴史化されて，文芸と人生は一体であるべきだという〈文芸と人生〉論議の結論へと落ち着いていくことで，表現するという行為は〈自己〉のあり方が必然的に埋め込まれてしまう作業として理解されるようになっていくという発見がなされている。

こうした歴史化された枠組みのなかでは，他ならぬ作者自身が作中に登場する〈自己表象テクスト〉は特別な意味をまとうことになると著者は言う。「自己発展」を志す〈自己〉そのものが表現の対象となり，表現することが「自己発展」をさらに推進する。こうした循環の中で試みられる表現は，自然主義の理念に沿ったありのままの〈自己〉の表現が指向されることもあるが，〈自己〉を理想化して表現し，そう表現することが〈自己〉の変革につながるという，造形性，力動性を獲得することも出てくると結論づけられていく。〈自己表象〉は作家としての〈自己〉のアイデンティティを表象しつつ形成する，独特の主体編成の形態となっていったという。このダイナミックな〈自己〉の造型論は文学史における「私小説論」の再認識を促すことは確実である。

次にイメージ闘争の機能については，〈自己表象〉が当時持ち得ていたはずの新しさの力を考えることから明らかになるとされる。すなわち登場してまだ日の浅い〈自己〉を描くという手法は，この時期おそらく〈新しさ〉の指標となったはずで，その書き手たちもまた「新しい作家」として見なされていく事態も存在したと考えられる。明治末，青年たちが書き始めた〈自己表象テクスト〉は，その表現様式の新しさそのものが意味を持っていたと認定される。そして同時にそれは，「新しい世代」の青年像をも提示するという，〈世代〉イメージを利用した言説闘争の道具としても機能していた可能性があるという展望が導かれることになる。

このように，本論文は明治30年代から40年代にかけての文学，美術，学問，教育に底流する〈知〉の枠組みを，〈自己表象〉という極めて斬新で透徹性のある概念を武器に，横断的に分析した意欲作と評価できる。その視点の独創性と文化の諸領域を横断的に分析する幅広い力量から，各章の結論はいずれも新鮮な発見に満ちている。その多くの章は学界における一流雑誌に掲載されていることからも，著者の力量が証明されているといってよい。日本近代の文化・文学の新たな領野，視点，方向性を豊かに示唆する点でも，一級の論文となっていると評価される。

ただ，それでも問題あるいは課題がないわけではない。まず第一に，日本近代における〈自己表象〉という課題が浮上するのは明治20年代からと考えられることがあげられる。ただ，この点については本論文の著者も気づいていることであって，本論文の今後の課題として追究されることになっている。第二には本論文の構成の屈折が指摘される。すなわち第Ⅰ部が文学テクストというよりも，その周辺のテクスト分析を考察の主対象としているために，文学史からすると外部の研究となっているのに対して，第Ⅱ部になると，文学テクストの分析に集中しているために，今度は文学史の内部の研究となっていて，全体の構成からみると，文化史から文学史への屈折となっているようにみえるということである。これはおそらく著者の学問が文学テクストの内と外とを絶えず往還しながら，越境的力動的な文化史の叙述を目指している中途の過程を，端なくも示してしまったものと考えられる。

以上の課題が指摘されるにしても，本論文の優れた成果を減殺するものではない。学位論文として十分に価値のあるものである。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。